O-5-09

外来看護師による病棟応援の取り組み

熊本赤十字病院　看護部
○村田（むらた）　千福（ちふく）

【はじめに】平成25年から一部を除き、病棟外来一元化を中止し新たな外来体制を開始した。コンセプトは、「応援体制」「外来業務の標準化」で業務を整備して標準化を進め、外来間での応援体制に取り組み概ね浸透できた。平成26年度は、病棟への応援体制に取り組んだのでここに報告する。
【取組み】病棟応援を開始するにあたり、診療時間の調査や2つ以上応援できる看護師を増やし業務拡大を進めた。病棟応援については、正職の外来看護師に限定し目的や方法を外来看護師全員に説明し理解、協力を得た。看護部の部署間応援の基準を参考にして7月から開始した。外来師長が病棟師長と連絡を取り、応援出動を決定した。初回の応援時に、業務内容や困った点などを報告書や面接で確認し、結果は病棟師長にフィードバックした。8月に師長会で、病棟応援の現状や要請があれば応援できる旨を紙面を用いて説明した。
【倫理的配慮】看護研究倫理委員会の倫理審査を受け了承を得た。
【結果・考察】応援部署は8部署、応援件数は延べ65件で滞在時間は最長2時間40分、最少20分で平均1時間30分だった。業務内容は、間接業務のアナムネや看護プロファイル入力など記録が多く、直接業務では清拭・体位交換・おむつ交換・排泄介助・見守り・血管確保・指導などであった。看護師の報告書や面接での困った点を受けて、指示を出す看護師の明確化や業務内容を統一した後は、スムーズに応援ができた。関連部署への応援を中心に進めたことで、不安や抵抗は少なく知識や技術を活かせた指導が発揮できる機会もあった。また、日常行ってない看護業務をペアで行うことで、新鮮と感じ学びになったようである。一方で、状態のわからない患者ケアへの不安はあった。今後も限られた時間であるが、外来看護師の能力を活かして、病院全体の看護の質向上に貢献できるよう病棟応援を継続していきたい。

O-5-10

手術室・病棟の相互理解と連携強化への取り組み

諏訪赤十字病院　中央手術室
○竹内（たけうち）　桂子（けいこ）

【目的】チーム医療が推進されている現在、手術を受ける患者はたくさんの医療従事者との関わりがある。その中でも術前・術後の看護を行う病棟看護師と術中看護を行う手術室看護師は手術患者にとって重要な存在である。しかし、その両者が直接手術患者についての情報交換をする機会は少なく、またお互いの看護や業務について知る機会も乏しいのが現状である。そこで、病棟看護師に手術室看護を知ってもらうこと、手術室看護師が病棟での周術期看護について知る事が両者の風通しの良い関係作りの助けとなり、そこから連携強化が図れ、手術患者の円滑な継続看護につながると考えて実践したことを報告する。
【方法】期間：2014年7月～12月。対象：手術室看護師28名と病棟看護師330名。手術室パンフレットを作成し11の病棟へ配布して手術室看護についての周知を図る。病棟の要望を調査し、結果をもとに現状の改善策を手術室看護師が実施する。実施後アンケート調査を行い評価する。
【結果】手術室パンフレットの作成、配布は「参考になった」と7割の病棟看護師が答えていることから一定の効果があったと言える。また、病棟看護師の意見・要望の調査結果は9割以上の手術室看護師が「参考になった」と答えており、病棟看護への関心が高まり大変有益なものとなった。そして、病棟では7割、手術室では8割の看護師が今回の取り組みに対して「相互理解や連携強化を考えるきっかけになった」と答えており、現状に一石を投じることができたと言える。
【まとめ】多くの看護師が互いの領域の看護を知りたいと希望している姿が見られたことから、今後互いの看護を直接体験できる制度や機会を作ることで、より風通しのよい関係が作れ、継続看護への意識向上や周術期看護の質の向上が期待できると考えられる。

O-5-11

一緒にチーム医療
～外部委託業者のモチベーション向上を目指して

さいたま赤十字病院　中央手術室[1]、同　2-5病棟[2]
○渡辺（わたなべ）　由紀子（ゆきこ）[1]、中根　庸子[2]

【背景】A手術室では器械の洗浄業務をすべて外部委託業者（以下、業者）に委ねている。しかし、業者は重要器械を取り扱うという認識が低く、また職場への定着も低い。このため看護師から見ると業者はモチベーションの低下しているように感じた。そこで業者のモチベーションに焦点を当て現状を把握し、さらに業務を自主的に遂行することを目的とした取り組みを行った。
【方法】対象：洗浄業務を担っている委託業者7名　方法：責任者への直接インタビュー　分析方法：SWOT 分析　研究期間：平成26年9月～11月
【倫理的配慮】インタビューに際して口頭にて同意を得た。また、結果は個人・業者を特定しない。
【結果】
1）現状分析　SWOT 分析にて組織的観点から、業者のモチベーションに関する分析を行った。その結果（1）知識不足（2）教育体制の不備（3）雇用不安があり、仕事に対するモチベーションが低いことがわかった。
2）取り組みと成果　（1）看護師が声をかけ、器械の取り扱いについてその都度説明し、繰り返すことで学習の機会とした。（2）業者同士で行っていた教育を看護師が写真を用いてマニュアル化し、統一した知識を得られるようにした。（3）当院の器械を熟知しており今後も一緒に働いていけるよう前向きに取り組んでもらいたいと、希望を伝えた。
これらを行った上で、器械管理の一部の棚の整理を依頼し、責任のある管理を委譲した。その結果、業者からは「責任を与えてもらえてよかった」「自信がついた」とコメントがあった。
【結論】業者自身のモチベーションを向上させ業務を自主的に遂行するためには、教育システムの見直しや業務に必要な人材と再認識してもらうことが重要であった。それぞれが自分の役割を果たすことで業務に関心を持つことができ、それがチーム医療を構成することにつながるといえる。

O-5-12

外来での看護実践につながる看護師リーダー制導入

福井赤十字病院　外来
○増田（ますた）　佳絵（よしえ）、加藤　智枝

【はじめに】A 病院では、医師事務作業補助者（以下 MS）が導入されており、外来看護師とともに診療支援を行なっている。これまでに、外来看護師と MS の業務分担を行い、役割を明確にしてきた。さらに、モデル外来でリーダー制を導入したところ、看護介入の必要な患者と関わる時間が増え、看護の充実につなげることができた。今回、その取り組みを外来全体での看護師のリーダー制導入へと展開した。
【目的】外来看護実践に向けた体制を整えるために、外来看護師のリーダー制を導入する。
【方法】1、各診療科で業務の洗い出しを行い、リーダー看護師、フリー看護師および MS の役割を明確にし、業務基準を作成した。2、看護師と MS が協働して診療支援ができるように、以下の3点を実施した。1）看護師と MS の連携に関する資料を作成し、モデル外来への見学会を実施した。2）MS のマニュアル、チェックリストを作成した。3）看護介入の必要な患者をリストアップした。3、リーダー制導入に関するアンケート調査を実施した。
【結果・考察】今回の取り組みにより、外来全体でリーダー制を導入することができた。また、アンケート結果から、看護師が MS と役割分担したことが、看護実践ができる体制につながっていることが示唆された。特に、看護師と密接な関係を持つ MS のマニュアル作成など MS の教育体制を整えたことは効果的であり、看護師のリーダー制の導入につなげることができたと考える。今後、MS の業務が充実することで、更に看護実践に向ける時間が増えると考える。
【今後の課題】1、MS がスキルアップできるように MS の教育体制の確立に協力する。2、各診療科での外来看護師と MS との業務調整をすすめ、看護実践の充実につなげる。

O-5-13

看護部倫理委員会による「倫理ニュース」発行における効果

秦野赤十字病院　看護部
○安斎（あんざい）　美穂（みほ）、真壁　泰子、高橋　由美子

【はじめに】A 病院看護部倫理委員会では、研修や委員会での事例検討を通じて看護師の倫理的感受性の向上を目指してきた。しかし、研修や委員会活動だけでは、その成果を実感出来ない現状があった。そこで2014年の委員会活動では、現場の倫理的看護問題を「倫理ニュース」として発行し、各部署で事例検討することで看護師の倫理的感受性に変化があるという仮説のもと研究したのでここに報告する。
【方法】1. 委員が持ち寄った各部署の倫理的看護問題を倫理原則に基づき事例検討後「倫理ニュース」として発行。2. 各部署で委員を中心に「倫理ニュース」掲載事例を検討。結果を次号のニュースへ掲載。3. 全6部発行後に看護職員にアンケート調査を実施。
【倫理的配慮】看護部の承認を得て、アンケートは個人が特定されないように処理。
【結果】1. アンケート配布数259枚中199枚回収、回収率77％であった。2.「倫理ニュースに興味を持ったか」では「はい」が92％であった。「倫理的問題に気が付くきっかけになったか」は「なった」37％、「少しなった」54％であった。「倫理的視点を持てるようになったか」は「なった」28％、「少しなった」62％であった。「倫理について知りたいと思うか」では「思う」34％「少し思う」58％であった。3. 委員会への要望では事例検討会の提供、倫理研修の充実、倫理ニュースへの要望の3つのカテゴリーがあった。
【考察】全質問項目で90％以上の肯定的な回答があり、看護職の倫理的感受性向上に対して一定の効果があったと考える。事例を見やすい「ニュース」という形式にしたことで興味を持ち、事例検討でも倫理的視点で考えることが出来たと思われる。今後は「倫理ニュース」内容の再検討や倫理研修の更なる充実に向けた看護部教育委員会との体系的な連携も視野に入れて活動する必要がある。

O-5-14

臨地実習指導者委員会の取り組み
～看護教員との研修会を企画・実施して～

秦野赤十字病院　看護部
○安部（あべ）　良子（りょうこ）、山本　恵利子、高橋　由美子

【はじめに】当院では、年間を通して6校6領域での看護学生の臨地実習を受け入れている。2009年から看護部臨地実習指導者委員会が、看護教員と臨地実習指導者（以後実習指導者とする）の連携、臨地実習の質の向上を目的として各看護師養成機関の教員と各病棟の実習指導者が参加する研修会の企画・実施を試みた。看護師養成機関主催の研修はあるが、看護部委員会主催の各校の看護教員が集う研修会の報告は少ない。看護の基礎教育に携わる教員と実習指導者が一堂に会して学び合える有意義な機会となっていると双方から高い評価が得られているため、その取り組みについて報告する。
【方法】2009年から2014年までに当委員会が企画した研修会後の参加者アンケートを集計する。研修内容は、看護基礎教育に携わる者として必要な資質向上に関するものや、医療・看護の現状から新たな実践や教育力を高める内容、2012年からは看護基礎教育に精通した講師の講演会等。
【倫理的配慮】A 病院看護部の倫理審査の承認後、個人が特定されないよう配慮した。
【結果及び考察】看護教員と実習指導者との双方の教育観や指導観を認識し合う機会となり、それぞれの役割が再認識できた、実習指導者がファシリテーターの役割から自己の学びに繋がった、研修内容にも興味・関心が高く、今後の実習に活かせる内容である等の意見があり、有意義な研修であると評価できた。学生が臨地実習の目的を達成するためには、看護教員と実習指導者との緊密な連携は不可欠である。本研修会が看護教員と実習指導者との人間関係を構築する機会ともなり、臨地実習が円滑に進められると考えられ、臨地実習の質の向上に繋がっている。更には各校の教員同士の情報交換の場ともなっており、今後も継続していく必要のある活動であると言える。